清貧の書

林芙美子

一

　私はもう長い間、一人で住みたいと云う事を願って暮した。古里も、古里の家族達の事も忘れ果てて今なお私の戸籍の上は、真白いままで遠い肉親の記憶の中から薄れかけようとしている。
　ただひとり母だけは、跌ずき勝ちな私に度々手紙をくれて叱って云う事は、——
　おまえは、おかあさんでも、おとこうんがわるうて、くろうしていると、ふてくされてみえるが、よう、

むねにてをあててかんがえてみぃ。しっかりものじゃ、ゆうて、おまえを、しんようしていても、そうそう、おとこさんのなまえがちごうては、わしもくるしいけに、さっち五円おくってくれとあったが、ばばさがしんで、そうれんもだされんのを、しってであろう。あんなひとじゃけに、おとうさんも、ほんのこて、しんぼうしなはって、このごろは、めしのうえに、しょおゆうかけた、べんとうだけもって、かいへいだんに、せきたんはこびにいっておんなはる、五円なおくれんけん、二円ばいれとく、しんぼうしなはぃ。てがみかくのも、いちんちがかりで、

あたまがいとうなる。かえろうごとあったら、二人でもどんなさい。

はは。

ひなたくさい母の手紙を取り出しては、泪(なみだ)をじくじくこぼし、「誰(だれ)がかえってやるもンか、田舎(いなか)へ帰っても飯が満足に食えんのに……今に見い」私は母の手紙の中の、義父が醤油(しょうゆ)をかけた弁当を持って毎日海兵団へ働きに行っていると云う事が、一番胸にこたえた。

――もう東京に来て四年にもなる。さして遠い過去ではない。

私は、その四年の間に三人の男の妻となった。いまの、その三人目の男は、私の気質から云えばひどく正反対で、平凡で誇張のない男であった。たとえて云えば、「また引越しをされたようですが、今度は、淋しいところらしいですね」このように、誰かが私達に聞いてくれるとすると、私はいつものように楽し気に「ええこんなに、そう、何千株と躑躅の植っているお邸のようなところです」と、私は両手を拡げて、何千株の躑躅がいかに美しいかと云う事を表現するのに苦心をする。それであるのに、三人目の男はとんでもなく白気きった顔つきで、「いや二百株ばかり、それもごく

ありふれた、種類の悪い躑躅が植えてある荒地（あれち）のような家敷跡（やしきあと）ですよ」という。で、私は度々引込（ひっこ）みのならない恥（は）ずかしい思いをした。それで、まあ二人にでもなったならば思いきり立腹している風なところを見せようと考えていたのだけれど、――私達は一緒（いっしょ）になって間もなかったし、多少の遠慮（えんりょ）が私をたしなみ深くさせたのであろうか、その男の白々（しらじら）とした物云いを、私はいつも沈黙（だま）って、わざわざ報いるような事もしなかった。

　もともと、二人もの男の妻になった過去を持っていて、――私はかつての男たちの性根を、何と云っても

今だに煤けた標本のように、もうひとつの記憶の埒内に固く保存しているので、今更「何ぞかぞ」と云い合いする事は大変面倒な事でもあった。

二

二人目の男が、私を三人目の小松与一に結びつけたについては――

お前を打擲すると

初々と米を炊ぐような骨の音がする

とぼしい財布の中には支那(しな)の銅貨(ドンペ)が一ツ
叩(たた)くに都合(つごう)のよい笞(むち)だ
骨も身もばらばらにするのに
私を壁(かべ)に突き当てては
「この女メたんぽぽが食えるか！」
白い露(つゆ)の出たたんぽぽを
男はさきさきと噛(か)みながら
お前が悪いからだと
銅貨の笞でいつも私を打擲する。

二人目の男の名前を魚谷一太郎と云って、「俺(おれ)の祖

先は、渡り者かも知れない。魚を捕ってカツカツ食って行ったのであろう」そういいながらも、貧乏をして何日も飯が食えぬと私を叩き、米の代りにたんぽぽを茹でて食わせたと云うては殴り、「お前はどうしてそう下品な女のくせが抜けないのだ。衿を背中までずっこかすのはどんな量見なんだ」と、そう云って打擲し、全く、毎日私の骨はガラガラと崩れて行きそうで打たれるためのデクのような存在であった。

私はその男と二年ほど連れ添っていたけれど、肋骨を蹴られてから、思いきって遠い街に逃げて行ってしまった。街に出て骨が鳴らなくなってからも、時々私

は手紙の中に壱円札をいれてやっては、「殴らなければ一度位は会いに帰ってもよい」と云う意味の事を、その別れた男に書き送ってやっていた。すると別れた男からは、「お前が淫売をしたい故、衿に固練の白粉もつけたい故、美味いものもたらふく食べたい故、俺から去って行ったのであろう、俺は今日で三日も飢えている。この手紙が着く頃は四日目だ、考えてみろ」――

この華やかな都会の片隅に、四日も飯を食わぬ男がいる。働こうにも働かせてくれぬ社会にいつもペッペッと唾きを吐き、罵りわめいている男が……私は

このような手紙には何としても返事が書けず、「あなたひとりに身も世も捨てた」と云う小唄をうたって、誤魔化して暮していた。

間もなく、魚谷と云う男も結婚したのであろう、大変楽し気な姿で、細々とした女と歩いているのを私は見た事がある。ちょうど、そのおり、私は白いエプロンを掛けていたので、呼び止めはしなかったけれど、私も早く女給のような仕事から足を洗わねばならぬと、地獄壺の中へ、働いただけの金を落して行く事を楽しみとしていた。

それから、――幾月も経たないで、正月をその場末

のカフェーで迎えると、また、私は三度目の花嫁となっていまの与一と連れ添い、「私はあれほど、一人でいたい事を願っていながら、何と云う根気のない淋しがりやの女であろうか」と云う事をしみじみ考えさせられていた。

三

「君は前の亭主にどんな風に叱られていたかね……」

与一は骨の無い方の鰺の干物を口から離してこういった。

「叱られた事なんぞありませんよ」
「無い事はないよ、きっときつい目に会っていたと思うね」
私は骨つきの方の鯵をしゃぶりながら風呂屋の煙突を見ていた。「どんなに叱られていたか」何と云う乱暴な聞き方であろう、私は背筋が熱くなるような思いを耐えて、与一の顔を見上げた。与一はくずぬいて箸を嘗めていた。私は胃の中に酢が詰ったように、——瞼が腫れ上って来た。
「どうして、今更そんな事を云うの、私を苛めてみようと思うンでしょう、——ねえ、どんなに貧乏しても

苛めないで下さいよ、殴らないでよね、これ以上私達豊かになろうなんて見当もつかないけれど、これ以上に食えなくなる日は、私達の上に度々あるでしょうし、でも、貧乏するからと云って、私の体を打擲しないで下さい。もしも、どうしても殴ると云うのンなら、私は……またあなたから離れなければならないもの、それに、私は今度殴られたら、グラグラした右の肋骨の一本は見事に折れて、私は働けなくなってしまうでしょう」
「ホウ……そんなに前の男は君を殴っていたのかね」
「ええこのボロカス女メと云ってね」

「道理で君はよく寝言を云っているよ。骨が飛ぶからカンニンしてッ、そう云って夢にまで君は泣いているンだよ」
「だけど——けっして、別れた男が恋しくて泣いているんじゃないでしょう。あんまり苛められると、犬だって寝言にヒクヒク泣いているじゃありませんか」
「責めているわけじゃない。よっぽど辛かったのだろうと思ったからさ」

「この鰺はもう食べませんか」
「ああ」

飯台が小さいためか、魚が非常に大きく見えた。頭から尻尾までである魚を飯の菜にすると云う事は久しくない事なので、私は与一の食べ荒らしたのまで洗うように食べた。与一は皿の上に白く残った鰺の残骸を見て驚いたように笑った。

「女と云う動物は、どうして魚が好きなのかね」

「男のひとは鱗が嫌いなンでしょう」

「鱗と云えば、お前が持って来た鯉の地獄壺を割ってみないかね、引越しの費用位はあるだろう」

「そうねえ、引越し賃位はね……でも八円のこの家から拾七円の家じゃア、随分と差があるし、それに、

昨日行って見たンだけれど、まるで狸でも出そうな家じゃありませんか」

「拾七円だってかまうもンか、いい仕事がみつかればそんなにビクビクする事もないよ」

「だって、あなたはまだ私より他に、女のひとと所帯を持った事がないからですよ。すぐ手も足も出なくなるだろうと私は思うのだけれど――」

「フフン、君はなかなか経験家だからね、だが、そんな事は云わンもンだよ」

与一との生活に、もっと私に青春があれば、きっと私は初々しい女になったのだろうけれど、いつも、

野良犬のように食べる事に焦る私である。また二階借りから、一軒の所帯へと伸びて行く、――それはまるで、果てしのない沙漠へでも出発するかのように私をひどく不安がらせた。

四

風呂敷の中から地獄壺を出して、与一の耳の辺で振ってみせた事が大きいそぶりであっただけに私は閉口してしまった。なぜならば、遠い旅の空で醤油飯しか食っていない、義父や母の事を考えると、私は古ハ

ガキで、地獄壺の中をほじくり、銀貨と云う銀貨は、母への手紙の中へ札に替(か)えて送ってやっていたのである。いま、「割ってごらんよ」といわれると、中味が銅貨ばかりである事を知っている私は、何としても引込みがつかなく白状していった。

「割ってもいいのよ、だけれど……本当はもう銅貨ばかりになっていますよ」

「銅貨だって金だよ、少し重いから弐参拾銭(にさんじっせん)はあるだろう」

この男は、精神不感性ででもあるのかも知れない。風が吹(ふ)いたほどにも眼(め)の色を動かさないで、茶を呑(の)ん

でいた。

「金と云うものは溜(たま)らぬものさ、——ああとうとう雨だぜ、オイ、弱ったね」

私は元気よく、柱へ地獄壺を打ちつけた。

ひめくりは六月十五日だ。

大安で、結婚旅立ちにいい日とある。

午後から雷鳴(らいめい)が激(はげ)しく、雹(ひょう)のような雨さえ降って来た。

山国の産のせいであろう、まるで森林のように毛深い脚(あし)を出して、与一は忙(いそ)がしく荷造りを始めた。私は

ひどく楽しかった。男が力いっぱい荷造りをしている姿を見ると、いつも自分で行李(こうり)を締(し)めていた一人の時の味気(あじけ)なさが思い出されてきて、「とにかく二人で長くやって行きたい」とこんなところで、——妙(みょう)にあま、くなってゆく。

私は塩たれたメリンスの帯の結びめに、庖丁(ほうちょう)や金火箸(かなひばし)や、大根擂(す)り、露杓子(つゆじゃくし)のような、非遊離的(ひゆうりてき)な諸道具の一切(いっさい)を挟(はさ)んだ。また、私の懐(ふところ)の中には箸や手鏡や、五銭で二切の鮭(さけ)の切身なんぞが新聞紙に包まれてひそんでいる。

「そんなにゴタゴタしないで、風呂敷へでも包んでし

まえよ」

「ええでもこうやって、馬穴（バケツ）をさげて行こうかと思っているのよ」

私達が初めて所帯を持った二階借りの家から、その引越し先の屋敷跡へは、道程から云うと、五丁ばかりもあったであろう。その僅（わず）か五丁もの道の間には、火葬場（かそうば）や大根畑や、墓や杉（すぎ）の森を突切（つっき）らない事には、大変な廻（まわ）り道になるので、私達は引越しの代を倹約（けんやく）するためにも、その近い道を通って僅かな荷物を一ツ一ツ運ぶ事にした。荷物と云っても、ビール箱（ばこ）で造った茶碗（ちゃわん）入れと腰（こし）の高いガタガタの卓子（テーブル）と、蒲団（ふとん）に風呂敷

包みに、与一の絵の道具とこのような類（たぐい）であった。

　蒲団はもちろん私のもので、これは別れた男達の時代にはなかったものである。浴衣（ゆかた）のつぎはぎで出来た蒲団ではあったが、――母はこの蒲団を送ってくれるについて枕（まくら）は一ツでよいかと聞いてよこした。私は母にだけは、三人目の男の履歴（りれき）について、少しばかり私の意見を述べて書き送ってあったので、母は「ほんにこの娘（むすめ）はまた、男さんが違（ちご）うてのう」そのように腹の中では悲しがっていたのであろうが、心を取りなおして気を利（き）かせてくれたのであろう、「枕は一ツでよいのか」と、書いてよこした。私は蒲団の中から出た

母の手紙を見ると何ほどか恥ずかしい思いであった。上流の人達と云うものは、恥ずかしいと云う観念が薄いと云う事を聞いているけれど――母親であるゆえ、下ざまの者だから、なおさら恥ずかしいと思うまいと心がけても、枕の事は、今までに送ってもらっているとするならば、私はもう三ツ新しい枕を男のためにねだっている事になる。そう考えてゆくと、ジンとするほどな、悲しい恥ずかしさが湧いて来た。

そのころ、与一は木綿の掛蒲団一枚と熟柿のような、蕎麦殻のはいった枕を一ツ持っていた。私は枕がないので、座蒲団を二ツに折って用いていたので、そう不

自由ではなかったが、目立ってその座蒲団がピカピカ汚れて来るのが苦痛であった。それで枕は二ツいるのだろうと云って寄こした母の心づかいに対して、私は二ツ返事で欲しかったのではあったが、枕は一ツでよいと云う風な、少々ばかり呆やけさせた思わせ振りを書き送ってやったのである。すると最も田舎風な、黒塗りの枕を私は一ツ手にした。死んだ祖母の枕ででもあったのであろうが、小枕が非常に高いせいか、寝ているのか起きているのか判らないほど、その枕はひどく私の首にぴったりとしない。

後、私は蒲団の事については、長々と母へ礼状を書

き送ってやったのであるが、枕の事については、礼の一言も、私は失念したかの形にして書き添えてはやらなかった。

五

躑躅はもちろん、うつぎや薊の花や桐の木が、家の周囲を取り巻いていた。この広い屋敷の中には、私達の家の外に、同じような草花や木に囲まれた平家が、円を描いたようにまだ四軒ほども並んでいた。

家の前には五六十本の低い松の植込みがあって、松

の梢から透いて見える原っぱは、二百坪ばかりの空地だ。真中にはヒマラヤ杉が一本植っている。

「東京中探しても、こんな良い所は無いだろうね」

与一はパレットナイフで牡蠣のように固くなった絵の具をバリバリとパレットの上で引掻きながら、越して来たこの家がひどく気に入った風であった。

玄関の出入口と書いてある硝子戸を引くと寄宿舎のように長い廊下が一本横に貫いていて、それに並行して、六畳の部屋が三ツ、鳥の箱のように並んでいる。

「だけど、外から見ると、この家の主人は何者と判断するでしょうね、私はブリキ屋か、大工でも住む家の

ような気がして、仕方がないのよ」
「フフン、お上品でいらっしゃるから、どうも似たり寄ったりだよ。ペンキ屋と看板出しておいたらいいだろう。——だが、こんな肩（かた）のはらない家と云うものは、そう探したってあるもンじゃないよ。庭は広いし隣（とな）りは遠いしねえ……」
「隣りと云えば、今晩は蕎麦を持って行かなければいけないのだけれど、どうでしょうか」
「幾つずつ配るもンだ？」
「そうね、三つずつもやればいいンでしょう」
引越した初めというものは、妙に淋しく何かを思い

出すのだ。私は何度となくこのような記憶がある。別れた男達と引越しをしては蕎麦を配った遠い日の事、——もう窓の外は暗くなりかけている。私は錯覚(さっかく)を払(はら)いのけるように、ふっと天井(てんじょう)を見上げた。
「オヤ、電気もまだ引いてないンですよ」
「本当だ、引込線も無いじゃないか、二三日は不自由だね」
長い間の習癖(しゅうへき)と云うものは恐ろしいものだ。私は立ち上ると、人差指で柱の真中辺を二三度強く突いて見た。すると、私自身でも思いがけなかったほど、その柱はひどくグラグラしていて天井から砂埃(すなぼこり)が二人

の襟足に雲脂のように降りかかって来た。

「ねえ、これはあンた、潰しにしたってせいぜい弐参拾円で買える家ですよ。どう考えたって、拾七円の家賃だなんて、ひどすぎるわ、馬鹿だと思うわ」

与一は沈黙って、一生懸命赤い鼻の先を擦っていた。

「この女は旅行に出ても、色々と世話を焼きたがる女に違いない。前の生活で質屋の使いや、借金の断りや、家賃の掛引なんぞには並々ならぬ苦労を積んで来たのであろう」与一はそんな事でも考えていたらしく、ズシンと壁に背を凭せかけて言った。

「僕はとてもロマンチストなんだからね、だが、君の

どんなところに僕は惹(ひ)かされたンだろう……」

　そうむきになって云われると、私はまた泪(なみだ)ぐまずにはいられなかった。「またこの男も私から逃げて行くのだろうか」男心と云うものは、随分と骨の折れるものだ。別れた二人の男達も、あれでもない、これでもないと云って、金があると埒(らち)もなく自分だけで浪費(ろうひ)してしまって、食えなくなるとそのウップンを私の体を打擲する事で誤魔化していた。

「ねえ、私のような女は、そんなに惹かされない部類の女なの？　だって夫婦(ふうふ)ですものね、それに、私は誰からも金を送ってもらう当(あて)はないし……」

与一は二寸ばかりの黄色い蠟燭を釘箱の中から探し出すと、灯をつけて台所のある部屋の方へ疳性らしく歩いて行った。真中の暗い部屋に取り残された私は、仕方なく濡れた畳に腹這って、袖で瞼をおおい、「私だってロマンチストなのよう」と何となく声をたてて唄ってみた。

六

長いこと、人間が住まなかったからであろう、部屋の中は馬糞紙のような、ボコボコした古い匂いがこ

もっていて、黒い畳の縁には薄く黴の跡があった。
「おい、隣りだけでも蕎麦を持って行っといた方が都合がいいぜ、井戸が一緒らしいよッ」
カツンカツン鴨居に何かぶっつけながら与一は不興気に私に呶鳴った。
私は参拾銭の蕎麦の券を近所の蕎麦屋から一枚買って来ると、左側の一軒目の家へ引越しの挨拶に出向いた。
隣りと云っても、田舎風にポツンポツンと家の間に灌木が続いているので、見たところ一軒家も同然のと

ころである。私は何度も水を潜(くぐ)って垢(あか)の噴(ふ)き出たようなネルの単衣(ひとえ)を着て、与一のバンド用の、三尺帯をぐるぐる締めていた。

「何をする人だろう」と考えるに違いない。尋(たず)ねた場合は、「絵の先生をしています」とでも濁(にご)しておこうと、私は私の家と同然な御出入口と書いてあるその硝子戸を引いた。

この家の主(あるじ)は、よっぽど白い花が好きと見えて、空地と云う空地には、早咲(はやざ)きの除虫菊(じょちゅうぎく)のようなのが雪のように咲いていた。

家根（やね）の上から白い煙（けむり）があがっている。花の蔭（かげ）では、蛙（かえる）が啼（な）くから帰ろうと歌って、男の子がポツンとひとりで尿（いばり）をしている。

一軒だけ挨拶を済まして帰って来ると、与一は、私が買って来ておいた、細い壱銭蠟燭に灯をつけて台所に続いた部屋の壁に何かベタベタ張りつけていた。家の中はもう真暗だ。

「何をする人なンだ？」

「煙草（たばこ）専売局の会計をしてるンですってよ」

「ホウ、固い方なンだね」

土色の壁にはモジリアニの描いた頭の半分無い女や、ディフィの青ばかりの海の絵が張ってあった。
こんな出鱈目（でたらめ）な色刷でも無聊（ぶりょう）な壁を慰（なぐさ）めるものだ。灯が柔（やわらか）いせいか、濡れているように海の色などは青々と眼にしみた。
「その隣りが気合術診療所（しんりょうじょ）よ」
「へエ、どんな事をやるンかね」
「私一人でこの家を見に来た時、気合術診療所の娘が案内してくれたのよ、とてもいい娘だわ」
「そう云えば、僕もあの娘が連れて来てくれたんだが、俺ンとこと同じようなもンらしい、瓜（うり）、トマト、茄子（なす）

の苗売りますなんて、木の札が出てるあそこなんだろう」

与一が灯を持って、三ツの部屋を廻るたび、私はまるで蛾のようにくっついて歩いた。右側の坊主畳の部屋には、ゴッホの横向きの少女が、おそろしく痩せこけて壁に張りついている。その下には箪笥の一ツも欲しいところだ。この部屋は寝室にでも当てるにふさわしく、二方が壁で窓の外には桐の枝がかぶさり、小里万造氏の台所口が遠くに見えた。

真中の部屋はもちろん与一のアトリエともなるべき部屋であろうが、四枚の障子が全部廊下を食っている

ので、三ツの部屋の内では、一番そうぞうしい位置にあった。

与一は、この部屋に手製の額に入れた自分の風景画を一枚飾（かざ）りつけた。あんまりいい絵ではない。私はかつて、与一の絵をそんなに上手（じょうず）だと思った事がない。それにひとつは私は、このように画面に小さく道を横に描くことはあんまり好きでないからかもしれない。「私は道のない絵が好きなんだけれど」そうも言ってみた事があるけれど、与一はむきになって、茶色の道を何本も塗りたくって、「君なんかに絵がわかってたまるもンか」と、与一はそう心の中で思っているのか

も知れない。

七

山は静かにして性をやしない、水は動いて情を慰む、静動二の間にして、住家を得る者あり、私は芭蕉（ばしょう）の洒落堂（しゃれどう）の記と云う文章の中に、このようにいい言葉があると与一に聞いた事がある。

そんなによい言葉を知っている与一が、収入の道と両立しない、法外もなく高い家賃で、馬かなんぞでも這入って来そうな、こんな安住の出来そうもない住家

に満足している事が淋しかった。

台所の流しの下には、根笹や、山牛蒡のような蔓草がはびこっていて、敷居の根元は蟻の巣でぼろぼろに朽ちていた。

「済みませんねえ。疲れていなかったら台所へ棚を一ツ吊して下さい」

「棚なんか明日にして飯にでもしないか」

「ええだけど何も棚らしいものがないから、どうにも取りつき場がないわ」

「眼が舞いそうだ。飯にしよう」

与一が後ろ鉢巻きを取りながら、台所へ炭箱を提げ

て来た。
　鮭が二切れで米が無い。
　それで、与一が隣りの部屋に去ると、私は暗がりの中に、割りそこなった鯉の地獄壺を尻尾の方から石でもってコツンコツンと割ってみた。
　脆(もろ)い土屑(つちくず)がボロボロ前掛けの上に壊(こわ)れて、膝(ひざ)の上に溢(あふ)れた銅貨は、かなりズシリと重みがあった。どれを見ても銅貨のようだ。私は一ツ一ツ五拾銭銀貨が一枚ぐらい混(ま)ざっていはしないかと、膝の上にこぼれた銭の縁を指で引掻いて見た。
　銅貨がちょうど二十枚で、拾銭の穴明き銭と五拾銭

銀貨が一枚ずつ、私の胸はしばらくは子供のように動悸（どうき）が激しかった。

　抜（ぬ）き替えたこの一銭銅貨がみんな五拾銭銀貨であったならば、拾円以上にもなっているであろう――私は笊（ざる）を持つと、暗がりの多い町へ出て行った。

　軒（のき）の低い町並みではあるけれど、割合と色々な商い店が揃（そろ）っていて、荷箱のように小さい、鳩（はと）と云う酒場などは、銀座を唄ったレコードなんかを掛けていたりした。

　その町の中ほどには川があった。白い橋が架（かか）っている。その橋の向うは、郊外（こうがい）らしい安料理屋が軒を並べ

ていて、法華寺があると云う事であった。

　私は米を一升ほどと、野菜屋では、玉葱に山東菜を少しばかり求めて、猫の子でも隠しているかのように前掛けでくるりと巻くと、何度となく味わったこれだけあれば明日いっぱいはと云う心安さや、またそんな事をいつまでも味わって暮さなければならなかった度々の男との記憶――いっそ、どこかに突き当って血でも吹き上げたならば、額でも割って骨を打ち砕いたならば、進んで行く道も判然とするであろう。仕事をするためにか、食べるためにか、どんなために人間は生きているのであろうか、私は毎日が一時凌ぎばかり

であるのが、だんだん苦痛になって来ていた。
手探りで枳（からたち）の門を潜ると、家の中は真暗で、台所の三和土（たたき）の上には、七輪の炭火だけが目玉のように明るく燃えていた。
「どこへ行っていたんだ？」
「私、ねえ……お米が無かったから、通りへ行っていたのよ」
「米を買いに？　なぜそう早く云わないんだ。もう動けないよッ」
与一は大の字にでも寝ているらしく、そういいながら、転々と畳をころがっているようなけはいがしてい

る。
「早くそう云うつもりで云いそびれたのよ、……すぐ焚けるからねえ」
「うん、――あのね、何も遠慮する事はないんだよ。金が無かったら無いようにハッキリ云いたまえ。ハッキリと云えばいいンだ。……俺は明日上野の博覧会にでも廻ってみよう。ペンキ屋の仕事のこぼれが少しはあるだろうと思うンだ。働かないで絵を描いて行こうなんて虫が良すぎる。そうだよ！　芸術だの、絵だのって、個人の慰みもンだアね、俺なんかペンキで夏のパノラマでも描いて、田舎の爺さん婆さんに見ても

らった方が相当なンかも知れないよ、それが似合っているんだ」
「あなた、私を叱っているんですか？」
「叱って。叱ってなんかいないよ、だから厭（いや）なんだ、君はひねくれない方がいい。――僕が君に云ったのは貧乏人はあんまり物事をアイマイにするもンじゃないと云う事だ。遠慮なんか蹴飛ばしてハッキリと、誰にだって要求すればいいじゃないかッ！　ヒクツな考えは自分を堕落（だらく）させるからね」
　米を洗っていると泪が溢れた。
卑屈（ひくつ）になるなと云った男の言葉がどしんと胸にこた

えてきて、いままでの貞女のような私の虚勢が、ガラガラと惨めに壊れて行った。

　与一はあらゆるものへ絶望を感じている今の状態から自分を引きずり上げるかのような、まるで、笞のようにピシピシした声で叫んだ。

「今時、溺れるものが無ければ生きて行けないなんて、ゼイタクな気持ちは清算しなければいけないんだ。全く食えないんだから……」

「食わなくったって、溺れていた方がいいじゃないの……」

「君はいったい何日位飢える修養が積ンであるのかね、

まさか一年も続くまい」

八

清朗な日が続いた。
井戸端（いどばた）に植えておいた三ツ葉の根から、薄い小米のような白い花が咲いた。
壁のモジリアニも、ユトリロもディフィも、おそろしく退屈な色に褪（さ）めてしまって、私は、与一が毎朝出掛けて行くと、一日中呆んやり庭で暮らした。
人気のない部屋の空気と云うものはいつも坐（すわ）ってい

る肩の上から人の手のように重くのしかかって来る。まして家具もなく、壁の多い部屋の中は、昼間でも退屈で淋しい。

青い空だ。
白米のような三ツ葉の花が、ぬるく揺(ゆ)れている。
「小母(おば)さんはどうして帯をしないのウ」
蛙の唄をうたった小里氏の男の子が、こまっしゃくれた首の曲げ方をして、私の腰のあたりを不思議そうに見ている。
「小母さんは帯をすると、頭が痛くなるからねえ」

「フン、――僕のお父(とう)ちゃんも頭が痛いの」

私は、青と黄で捻(ひね)ったしでで紐(ひも)で前を合わせていた。

――ああ、疲れた紅(あか)いメリンスの帯はもうあの朝鮮人の屑屋の手から、どこかの子守女へでも渡っている事だろう。帯を売って五日目だ。もう今朝(けさ)は上野へ行く電車賃もないので、与一は栗色(くりいろ)の自分の靴(くつ)をさげて例の朴のところへ売りに行った。

「何ほどって？」

「六拾銭で買ってくれたよ」

「そう、朴君はあの靴に四ツも穴が明いているのを知っていたんでしょうか？」

「どうせ屋敷めぐりで、穴埋めさ、味噌汁吸って行けってたから呑んで来た」
「美味かった？」
「ああとても美味かったよ……弐拾銭置いとくから、何か食べるといい」
私は今朝から弐拾銭を握ったまま呆んやり庭に立っていたのだ。松の梢では、初めて蟬がしんしんと鳴き出したし、何もかもが眼に痛いような緑だ。
唾を呑み込もうとすると、舌の上が妙に熱っぽく荒れている。何か食べたい。——赤飯に支那蕎麦、大福餅にうどん、そんな拾銭で食べられそうなものを

楽しみに空想して、私は二枚の拾銭白銅をチリンと耳もとで鳴らしてみた。

しんしんと蟬は鳴いている。

透けた松の植込みの向うを裸馬が何匹も曳かれて通る。

「良いお天気で……」

屑屋の朴が秤でトントン首筋を叩きながら、枳の門の戸を蹴飛ばして這入って来た。

「朴さん、あの靴、穴が明いていたでしょうに……」

「よろしいよ。どうせ屋敷で儲けるからねえ」

「助かりましたわ」

「よろしいよ。小松さんは帰りは遅いですか？」
「ええいつも夜になってから……」
「大変ですな。――ところで、石油コンロ買いません
か、金は三度位でよろしいよ」
「ええ……どの位ですウ」
「九拾銭でよろしいよ。元々、便利ですよ」
　朴は冷々と気持ちがいいのであろう、玄関の長い廊
下に寝そべって、私が石油コンロを鳴らしている手附
を見ていた。大分、錆附いてはいたけれど、灰色のエ
ナメルが塗ってあって妙に古風だ。心に火をつけると、
ヴウ……と、まるで下降している飛行機の唸りのよう

な音を立てる。
「石油そんなに要（い）りません。一罐（かん）三月（みつき）もある。私の家もそう」
石油コンロを置いて朴が帰ると私はその灰色の石油コンロを、台所の部屋の窓ぎわに置いて眺めた。家具と云うものは、どうしてこんなに、人間を慰めてくれるのだろう。

夕方井戸端で、うどんを茹（ゆ）でた汁を捨てていると、小里氏の子供が走って来て空を見上げた。
「ねえ、小母さん！　飛行機が飛んでらア」

「どこに？」
「ホラ、音がするだろう……」
私は、空を見上げている子供の頭を撫でていった。
「小母さんところの石油コンロが唸っているのよ、明日お出で、見せて上げるから……」
そういって聞かせても、子供は、(炭や薪で煮焚きしているのであろう、小里氏の屋根の煙を私は毎日見ている)不思議そうに薄暗い空を見上げて、「飛行機じゃないの」といっていた。

与一は日記をつけることがこまめであった。私であったら、馬鹿らしく、なにも書かないでいるだろう、そんな無為（むい）に暮れた日でも、雨だの、晴れだの与一は事務のようにかき込んでいた。

　雨だの晴れだのが毎日続くと、与一自身もやりきれなくなってしまうのか、ついには「蚊帳（かや）が欲しい」とか「我もし王者なりせばと云う広告を街で見る」そんな事などが書き込まれるようになった。

　だが飢える日が鎖（くさり）のように続いた。もうこまめな与一も日記をほうりっぱなしにして薄く埃をためてお

く事が多くなった。
そうして、日記の白いままに八月に入ったある朝、――跌ずいた夢でも見たのであろう、私は眼が覚めると、私はいつものように壁に射した影を見ていた。浅黄色の美しい夜明けだ。光線がまだ窓の入口にも射していない。
その時、私は新しげな靴の音を耳にした。「まだ五時位なのに誰だろう」そんな事を考えながら、襖を押して庭の透けて見える硝子戸を覗くと、大きな赭ら顔の男が何気なく私の眼を見て笑った。背筋の上に何か冷いものが流れた気持ちであったが、私も笑ってみせ

た。

「小松君起きてるウ？」

「随分早いんですね、ただ今起します」

朝の光線のせいか、何もかも新しいものをつけている紳士が、このように早く与一を尋ねて来ると云う事は、よっぽど親しい、遠い地からの友人であろうと、私は忙がしく与一を揺り起した。

「そんな友人無いがね、小松って云ったア？」

「ええ、起きているかって笑って云っているのよ」

「変だなア」

与一が着物を着ている間に、私は玄関の鍵(かぎ)を開けた。すると、どうであろう、四五人の紳士達が手に手に靴を持ったまま、一本の長い廊下を、何か声高く叫びながら、三方に散って行った。驚いて寝室に逃げこむ私の後からも、二人の紳士が立ちはだかって叫んだ。
「君が小松与一［＃「与一」は底本では「与一郎」］君かね？」
与一も面喰(めんくら)ったのだろう、脣(くちびる)を引きつらせてピクピクさせていた。
「ちょっと、署まで来てもらいたい」
「へえ、……いったい何ですウ、現行犯で立小便位な

ら覚えはあるンですが、原因は何んですウ」
「そんなに白っぱくれなくてもいいよ」
「君は小松与一だろう？」
「そうですよ。小松与一と云うペンキ屋で、目下上野の博覧会でもって東照宮の杉の木を日慣らし七八本は描いていますよ」
「フフン君が絵を描こうと描くまいと、そんな事はどうでもいいんだ、一応来てもらいたい」
「思想犯の方でですか？――僕は今ンところは臨時雇いで、今日行かないと、また、外の奴に取られッちまうんですがね」

「まあ、男らしく来て、一応いい開いたらいいだろう」
「何時間位かかるンですか？　長くかかるンじゃないンですか？」
落ちついたのか与一は脣を弛（ゆる）めて笑い出した。
「二十九日だなんて事になると厭だから、こんなもンでもお見せしましょう」
そういって押入れの中から、与一は召集（しょうしゅう）令状を出して見せた。
「本当に何か人違いでしょう？　僕はこの月末はこうして、三週間兵隊に行くンですがね」
他の二ツの部屋を調べた紳士諸君も呆んやりした顔

で、
「オイ、どうも人違いらしいぜ」
「そんな事はない。この男だよ、僕は確証を得ているンだ」
「そうかねえ、でもちょっとおかしいよ君、――君、この与一は雅号(がごう)ではないだろうね。本名は小松世市、こう書くンだろう」
「だから、召集令状を見たらいいでしょう」
一枚の小さな召集令状が、あっちこっちの紳士諸君の手に渡った。
「不思議だねえ、もいちど探しなおしだ。ところで、

他(ほか)に客は無いだろうね」

枳の門の外には、白い小型の自動車が待っていた。仕入れに行く魚屋や、新聞配達等が覗いている。

「チエッ、何のために月給貰(もら)っているンだ。おいッ！加奈代(かなよ)、塩を撒(ま)いてやれ」

「だって、塩がないのよ」

「塩が無かったら泥(どろ)だっていいじゃないかッ、泥が無かったら、石油でもブッかけろ」

「こんなに家中無断で引掻(ひっか)きまわして、済みませんなンて云わないッ」

「云うもンか……あンなのを見ると、食えないで焦々しているところだ、赤くなりたくもなるさ」

「小さい頃、私の義父さんも、路傍に店を出して、よく巡査にビンタ殴られていたけれど——全く、これより以上私達にどうしろって云うのかしら？」

十

上野の博覧会の仕事もあと二三日で終ると云う夕方、与一は頭中を繃帯で巻いて帰って来た。

「八方塞りかね。オイー！　暑いせいか焦々して

喧嘩しちまったよ」
「誰とさア」
「なまじっか油絵の具を捏ねた者は、変な気障さがあって困るって、ペンキ屋同士が云ってるだろう、だから、僕の事なンですか、僕の事なら僕へはっきり云って下さいって、云ってやったンだ。するとね、ああちんぴら絵描きは骨が折れるって云ったから、何をお高く止ってるンだ馬鹿野郎、ピンハネをしてやがってと呶鳴ってやったら、いきなりコップを額にぶっつけたンだ」
「マア、まるで土工みたいね、痛い？」

「硝子がはいったけど大丈夫(だいじょうぶ)だろう」
バンド代りに締めた三尺帯の中から、与一は十三日分の給料を出していった。
「日当弐円五拾銭だちって、こうなると、五拾銭引いてやがる。おまけに、会場の方は俺達の分を四円位にしといてピンを刎(は)ねるンだから、やりきれないさ」
それでも、参拾円近い現金は、ちょっと胸がドキリとするように嬉(うれ)しかった。
「でも、故意に喧嘩して、止(や)めさせるンじゃないの？」
「そうでもないだろうが、皆(みな)不平を云いながら、前へ出るとペコペコしてるンだからね」

「ソンなものよ」

久し振りに石油を一升買った。

灰色の石油コンロは、円い飛行機のような音をたてて威勢よく鳴っている。

二人は庭へ出て水を浴びた。

黝くなった躑躅の葉にザブザブ水を撒いてやりながら、何気なく与一の出発の日の事を考えていた。

「もう後六日で兵隊だねえ……」

「ああ」

「留守はどうしよう」

「参拾円近くあるじゃないか、俺の旅費や小遣い(こづかい)は五円もあればいいし、家賃は拾円もやっとけば、残金で細々食えないいかい？」
「そうだね」
気合術診療所から貰って来たトマトの苗が、やっと三ツばかり黄色い花を咲かせていた。あの花が落ちて、赤い実が熟する頃は帰って来るのだろう。——私一人で何もしない生活の不安さや、醤油飯の弁当を持って海兵団へ仕事に行っていた義父が、トロッコで流されたという故郷からの手紙を見て、妙に暗く私はとらわれて行った。

唐津出来の茶碗や、皿や丼などを、蓙を敷いて、
「どいつもこいつも、茶碗で飯を食わねンだな、ホラ唐津出来の茶碗だ。五ツで二分と負けとこウ、これでも驚かなきゃ、ドンと三貫、ええツこの娘もそえもンで、弐拾五銭、いい娘だぜ、髪が赤くて鼻たらし娘だ！」
私は、長崎の石畳の多い旧波止場で、義父が支那人の繻子売りなんかと、店を並べて肩肌抜いで唐津の糶売りしているのを思い出した。黄色いちゃんぽんうどんの一杯を親子で分けあった長い生活、それも、道路妨害とかで止めさせせられると、荷車を牽いて北九州の

田舎をまわった義父の真黒に疲れた姿、――私は東京へ出た四年の間に、もう弐拾円ばかりも、この貧しい両親から送金を受けている。

結局、義父たちが佐世保に落ちついてもう一年になるけれど、海兵団のトロ押しが、とうとう義父の働く最後であったのかも知れない。

暗雲(やみくも)にヒッパクした故郷からの手紙だ。

――それで、おまえが、なんとかなれば七円ほど、くめんをして、しきゅう、たのむ、おとっさんも、いたか、いたか、きってくれ、いいよんなはる。

せきたんさんで、あらいよっとじゃが、びょういんにいったほうが、よかあんばいのごとある。

私は夕飯の済んだ後、与一に故郷からの手紙を見せようと思った。与一は何か考えているのであろう、何となく淋しそうに窓に凭れて唄をうたっていた。その唄の節はひどく秋めいた、憂愁（ゆうしゅう）のこもったものであった。私は何度となく熱い茶を啜（すす）りながら、手紙を出す機会を狙（ねら）っていたが、与一はいつまでもその淋し気な唄を止めなかった。

十一

沈黙(だま)って故郷へは送金しよう、――私はそう思って毎日与一の額の繃帯を巻いてやった。

「ちょっとした怪我(けが)でも痛いンだから、これで腕(うで)や脚(あし)を切断するとなると、どんなでしょう？」

「それはもう人生の終りだよ、俺だったら自殺する」

「働かないとなると、生きていても仕様がないからね……」

与一が、山の聯隊(れんたい)へ出発した日は、空気が灰色になるほど風が激しかった。「まるで春のようだ、気持ち

の悪い風だ」誰もそういいながら停車場に集った。
「石油コンロは消してあったかい?」
与一は、こんな事でもいうより仕方がないといった風に、私の顔を見て笑った。
奉公袋(ほうこうぶくろ)を提げて下駄(げた)をはいた姿は、まるで新聞屋の集金係りのようで、私はクックッと笑い出して、「火事になった方がいいわ」と、言葉を誤魔化した。
「一人で淋しかったら、診療所の娘でも来てもらうといい」
「大丈夫ですよ、一人の方が気楽でいいから……」
与一に対して、何となく肉親のような愛情が湧(わ)いた。

かつての二人の男に感じなかった甘さが、妙に私を泪もろくして、私は固く二重顎を結んで下を向いた。
「厭ンなっちゃう、まったく……」
私は甘いものの好きな与一のために、五銭のキャラメルと、バナナの房を新聞に包んで持たせてやった。
「どうせ今晩は宿屋へでも泊るンでしょう？」
「知った家はないし、どうせ兵営の傍の木賃泊りだ」
「召集されて随分悲惨な家もあるンでしょうね」
「ああ百姓なんか収穫時だ、実際困るだろう」
海水浴場案内のビラが、いまは寒気にビラビラしていて、駅の前を行く女達の薄着の裾が帆のようにふく

れ上っていた。

拡声機は発車を知らせている。

「元気でいるンだよ」

長いホームを歩いている間中、与一は同じ事を何度も繰り返した。私は、そんな優しい言葉をかけられると、妙に胸が詰った。で、いかにも間抜けた女らしく見せるべく、私は頬っぺたをふくらまして微笑んでみせた。頬をふくらましていると、眼の内が痛い。私はじっと唇をつぼめて、与一が窓から覗くのを待った。

山へ行く汽車は煤けたままで、バタバタ瞼のように窓を開けた。窓が開くと、たくさんの見送りが、蟻の

ように窓に寄った。与一は網棚の上に帽子と新聞包みを高く差し上げている。咽喉仏が大きく尖って見えた。その逞しい首を見ていると、耐えていた泪が鼻の裏にしみて、私は遠い時計の方を白々と見るより仕方がなかった。

「おいッ！」

与一はもうキャラメルを一ツむいて、頬ばったらしく、口をもぐもぐさせて私を呼んだ。

「何？」

「キャラメル一ツやろう」

誰も私達の方を向いてはいなかった。与一の座席は

洗面所と背中合せなので気楽に足を投げ出して行けるだろう。与一は思い出したように指を折って、「三七、二十一日もかかるンかね」一人で呟(つぶや)いてうんざりしたかの風であった。

「誰も見てくれるもンが無いンだから、病気をせんように、気をつけるンだぞ」

　私は汽車が早く出てくれるといいと念じた。焦々した五分間であった。その辛(つら)い気持ちをお互(たが)いにざっくばらんにいえないだけに、余計焦々して私はピントを合せるのに、微笑の顔が歪(ゆが)みそうであった。

十二

一人になったせいであろう。昼間でも台所の部屋などは、ゴソゴソと穴蔵蛩（こおろぎ）が幾つも飛んでいた。与一が出発して九日になる。山から来た最初の絵葉書には、汽車が着いて、谷間の町の中を、しかも、夜更けて宿を探すに厭な思いをしたと書いてあった。

第二番目の葉書には、松本市五〇聯隊留守隊、第二中隊召集兵、小松与一宛（あて）と住所が通知してあった。

三番目の絵葉書は、高原の白樺（しらかば）が白く光って、大きい綿雲の浮（う）いた美しい写真であった。文面には、「今

日は行軍で四里ばかり歩いた。田舎屋で葡萄を食べて甘美かった。皆百姓は忙がしそうだ。歩いていると、呑気なのは俺達ばかりのような気がして、何のために歩いているのか判らなくなって来る。こうしていても、気が気でないと云う男もいた。留守はうまくやって行けそうか。知らせるがいい」こんな事が書いてあった。

　私は徒爾な時間をつぶすために、与一の絵葉書や手紙を、何度となく読んでまぎらした。あの下駄はどう処分したであろうか、逞しい軍人靴をはいて、かえって、子供のように楽しんでいるかも知れない。出発の日の与一の侘しい姿を思うと、胸の中が焼けるように

痛かった。

第四番目の手紙は、どうも俺は、始終お前に手紙を書いているようだ。お前は甘い奴と思うかも知れない。――遠く離(はな)れて食べる事に困らないと、君がどんな風に食べているンだろうと云う事が案ぜられるのだ。まだ一度も君から手紙を貰っていない。君もこれから生活にチツジョを立てて、本当に落ちついたらいいだろう。落ちつくと云う事は、ブルジョアの細君の真似(まね)をしろと云うのではない。俺と君の生活に処する力を貯(たくわ)える事さ。金のある奴達は酒保へ行く。無いものは班にいて、淋しくなると出鱈目に唄をうたう。唄を

うたう奴達は、収穫を前にして焦々しているのだろう。俺の隣りのベッドに舶大工がいる、子供三人に女房を置いて来たと云って、一週間目に貰った壱円足らずの金を送ってやっていた。そんなものもあるのだ。マア元気でやってくれるように、小鳥が飼ってあるとか、花でも植えてあるならその後成長はどんな風かとでも聞けるが、そこには君自身の外に、何も無いンだからね。――元気で頼む」

かって知らなかった男の杳々とした思いが、どんなに私を涙っぽく愛しくした事であろう。

私は手鏡へ顔を写してみたりした。「お前も流浪の

性じゃ」と母がよく云い云いしたけれど、二十三と云うのに、ひどく老け込んで、脣などは荒さんで見えた。瞼には深い影がさして、あのように誇っていた長い睫も、抜けたようにささくれて、見るかげもない。

紅もなければ白粉もない、裸のままの私に、大きい愛情をかけてくれる与一の思いやりを、私は、過去の二人の男達の中には探し得なかった。それに、子供の頃の母親の愛情なんかと云うものは、義父のつぎのもののようにさえ考えられ、私は長い間、孤独のままにひねくれていたのだ。

五番目の手紙には、「まだ、お前の手紙を手にしない。君は例の変な義理立てと云った風なものに溺（おぼ）れているのだろう。もう一二年もたったらそれがどんなに馬鹿らしかったかと解（わか）るだろうが、そんな古さは飛び越える決心をして欲しい。君は、僕に、なるべく悪い事を聞かすまい、弱味を見せまいとしているらしいが、そンな事は吹けば飛ぶような事だ。マア、とにかく困った習癖（しゅうへき）だと云っておこう。同封（どうふう）の金は、隊で貰ったのと、東京を出る時、旅費や宿料の残りだ。僕は壱銭もなくなった。だが生きるようなものは食っている。困らない。山は快晴だ」

第六番目の手紙、「君は僕の心の中で、だんだん素直に成長して行く。手紙は読んだ。一字も抜かさないように読んだ。君のように怱々(そうそう)と読むンではない。君の姿を空想して読むのだ。僕の送った弐拾円ばかりの金が、よっぽど応(こた)えたらしいが、何かあるのだろうとは思っていた。——お母(かあ)さんへ拾五円送ったって、そんな事を僕が怒(おこ)ると思ったら、君は僕の事について認識不足だよ。僕からも、佐世保へ手紙を出しておこう。君は働きたいとあるが、それもいいだろう。

弐円ぐらいでは十日も保つまいし、ただ女給と云う商売は絶対に反対だ。威張る商売ではない。僕は色々

の事を兵営で考えさせられた。――ところで、こんな甘いことも時に考える。二人で佐世保へ新婚旅行ぐらいしてみたいとね。兵営の中は殺風景で、寝ても起きても女の話だ。僕もそろそろ君への旅愁がとっつき始めた。十日すれば会える。女給以外の仕事であったら、元気に働いて生きていてくれ。小里氏が気が狂ったそうだが、気の毒な隣人は大いに慰さめてあげる事だ」

　トマトの花が落ちて、青い実を三ツ結んだ。かつてなかった楽しさが、非常に私を朗らかにした。私は与一の手紙が来てから、朴の紹介で、気合術診療所の娘

と、朝早く屑市場へ浅草紙を造る屑を択（よ）りに通った。日暦（ひごよみ）を一枚一枚ひっぺがしては、朝の素晴しく威勢のいい石油コンロの唸りを聞いて、熱い茶を啜る事が、とても爽（さわ）やかな私の日課となった。

　第七番目、第八番目、第九番目、山の兵営からの手紙は頬を染めるような文字で埋（うま）っている。——吾木香（われもかう）すすきかるかや秋くさの、さびしききはみ、君におくらむ。とても与一の歌ではあるまい。だが眼の裏に浸（し）みる歌のひとふしではあった。

（昭和六年十一月）

底本：「ちくま日本文学全集　林芙美子」筑摩書房
1992（平成４）年12月18日第1刷発行
底本の親本：「現代日本文学大系69」筑摩書房
1969（昭和44）年
初出：「改造」
1931（昭和６）年11月
入力：土屋隆
校正：林幸雄
2006年9月21日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。